

総論 民営化とは？市場経済と公共性から考える

市場とは何か
—「公・私・民」で考える—

松井 彰彦

東京大学教授

聞き手：加賀美太記（就実大学准教授）



社会のメカニズムとしての市場

【加賀美】

本号のテーマである「民営化」は、一般的には行政等が運営の主体であった組織を企業組織へと変更する、もしくは企業組織に売却して、市場における競争に基づいて効率化を図るものとして理解されていると思います。では、そもそも民営化の舞台となる「市場」とは、どのように捉えられるものなのでしょうか。

まずは、この「市場とは何か」という問いについて、市場を分析対象とする経済学がどのように捉えているのかを教えてください。

【松井】 経済学では、社会における様々なメカニズムの一つとして市場を捉えます。人はひとりでは生きられないので、人びとは集まって社会を形成します。ところが、何かしらのメカニズムがないと、集団はうまく機能しません。そのため、人びとは社会を回すためのメカニズムをつくっていく。市場とは、そうしたメカニズムの一つです。

現代社会における主要なメカニズムとしては、市場（私）と政府（公）、そして共同体（共）の3つがあげられます。最近では、「公と共と私の3つすべてが重要である」という言い方がされますが、歴史にお

いて最初に重要な役割を担ったのは共同体です。顔の見えるつながりである共同体では信頼と強調の関係がベースになっており、ときにルールを破ったものは制裁を受けます。こうした共同体が人々の社会の出発点でした。

一方、共同体と共同体の間の取引が、かなり古くから存在していたと言われています。縄文時代には、すでにかなり広い範囲で共同体間の取引が行われていたそうです。ところが、共同体同士の関わりにおいては、共同体の内部のように、制裁によって何かしらのルールを守らせることは難しくなります。そのため、その場ごとに決済したり、信用で将来を担保にして取引をする、いわゆる市場の原型のようなものが出てきます。こうした、お互いの顔が見えない「私」、ないしは「市場」という場が発展すると同時に、共同体の力はだんだんと失われていきました。

そうすると、今度は共同体の代わりに広域の「市場」をまとめるものも必要になってきます。そこで登場してきたのが「公」です。

ざっくり言えば、このように捉えられるでしょう。この「共・私・公」が3つの大きなメカニズム、われわれ人間社会の構成要素であると言えます。

ところが、近代化の過程で、共同体の役割はさらに減っていき、その分、「公」と

「私」の役割が大きくなっていきます。3つのメカニズムのバランスが、「共」から「公」や「私」へと重点を移してきた、と言えると思います。いまでは共同体が担った役割の大部分は「公」に移っています。そうして、共同体がますます弱くなり、「共同体はしがらみもあるし、面倒だし、もう要らないや」となっている。現在では、ひとびとがくらしにおいて主に頼る先は「私」になっています。ただ、「私」に頼るだけでは心もとないので、別の何かにも入ってほしい。そこで「共」に戻るのではなくて、「公」をもう少し充実させ広げていこうとする。これがこの間の社会の大きな流れだと思います。

市場の本質は 人々に選択肢を与えること

現代社会では、たとえ市場を嫌いだったとしても、市場に頼らないで生きている人はおそらく一人もいません。市場は社会の基本的なメカニズムとして広がっているからです。しかし、市場は上手くいかない場合もあります。そうした市場とどう付き合っていくか、暴れ馬のような市場をどう乗りこなしていくかが、現代における非常に重要な課題です。

ですが、市場を「公」によって抑えつけたり、市場を「公」が代替すればいいのでしょうか。こうした案に、多くの経済学者は反対するでしょう。昨年、出版した『市場って何だろう』にも書いていますが、市場の本質はさまざまな選択肢を人びとに与えることであり、「公」がそれに代わって同じような機能を果たすのはなかなか難しいからです。それを実際にやろうとしたのが、かつての社会主義国家であり、その破

綻を見ても、「公」には限界があることは明らかです。



『市場って何だろう―自立と依存の経済学』
松井彰彦著 (2018) 筑摩書房

たとえば、「公」と「私」について考える際に、よく引き合いに出されるパンで考えてみましょう。「公」が作るパンはノルマ的なので、「こういう栄養価のパンを何個作る」ということが優先されて、主観的なおいしさなどは後回しにされます。つまり、いくつ作るかといった量がポイントになる。一方、市場中心の「私」の領域では、作っても売れなければ意味がないので、いくつ作るかではなく、いくつ売れるかが鍵になります。そして、売るためには、相手に気に入ってもらわないといけないので、相手が好きな物を作ろうとする。ここがまさに市場の本質です。相手が気に入った物を作らなければ売れない。だから相手のことを考えて、相手が気に入るものを探していく。そうした過程から、よりいいものが作られ、消費者はよりおいしいパンを食べることができて幸せになれる。作っている生産者も儲かるかもしれない。あるいは、ボロ儲けする人も出てくるかもしれません。

が。

このように、「私」に比べると、「公」は相手（利用者）のニーズに合ったものを作りづらいところがあります。民営化の動きも、根幹には消費者にとってより良いものを提供するという考え方があります。民営化においてはコスト云々が喧々諤々に議論されます。しかし、コストはもちろん重要なのですが、それと並んで、あるいはそれ以上に重要なのが、民営化によって消費者に選択肢を与えて、より消費者のことを考えたサービスが提供されるようにする、ということです。これが「公」では十分にできないということが、いままでいろいろなところで示されてきたからです。

ただ、すべてを市場にまかせていいかという、そうもいきません。「市場の失敗」という言葉があるように、市場はいろいろな条件が整わないとうまく機能しないからです。そこには「公」の役割があるでしょう。経済学では、いわゆる公共財の供給が最大のポイントです。

公共財は どこまで民営化できるのか

そう考えていくと、いまの民営化で問題になっているのは、「公共財」と呼ばれる、いままでは「公」が提供してきた財やサービスを、はたして民営化して「私」の領域に持ち込んでいいのかということになると思います。

そういう大枠で捉えず、コストや品質だけを見ていても、民営化の全体像はつかめてこないでしょう。たとえば水道の民営化なら、「水」や「水道」の性質にまで立ち返って、それを「私」の領域に、どの程度、どういうかたちで受け渡していくのか、と

というのが非常に大きな論点になると思います。もちろん、明らかに「これは市場に任せてはまずいだろう」というものはあります。自衛隊を昔の民兵のようにしたり、あるいは警察機構を私的警察のようなものに戻すのかといえば、ほとんどの人は否定的な意見を持つでしょう。逆に、パン屋を公営にしろと言うと「それはあり得ない」という話になります。これらは、どこで線を引くのかという問題です。いまの民営化の議論は、いままで引いていた線よりもさらに踏み込んでいる点が特徴だと思います。ただし、「どこで線を引くのか」という論点は、正直なところ、すぐれて実証的な問題だと思うんですね。理論的に明らかなケースもありますが、現実には「公」と「私」の間には相当なグレーゾーンがあり、それぞれのケースについて実証的に考えざるを得ないのだらうと思います。たとえば、昔は「公」で運営されていた学童保育ですが、民営化当初はいろいろと懸念も抱かれていましたが、どんどんと民間に任せられるようになっていますが、何とか上手くやっています。

「私」と「公」の中間的なあり方

あるいは、最近、話題になっている保育園をどこまで「私」に任せるのかという議論では、「公」と「私」のいいところを取ろうとする公設民営などの考え方も検討されています。「私」だと、利益に走って質が担保されなくなるところがあるので、ある程度を「公」に任せるか、「公」が介入をしないといけない。反対に、パンの例でもわかるように、「公」に任せていると質がどんどん下がっていく場合も考えられる。正反対の事態のようですが、消費者の

ことをどれくらい考えるのか、という問題は共通しています。

保育の問題でいえば、子どもが意思決定するのは難しいでしょうから、保護者がその保育をどう評価しているかを、何らかのかたちで運営に反映させる機能の有無が「私」に任せる上で決定的に重要になります。

ただ、パンの場合は美味しくなければ売れなくなるだけなので簡単ですが、保育の場合は子どもを預けなくなる前に、子どもに事故が起きたら大変です。だから、消費者の声を反映させるだけでなく、どこまでを「私」が担い、どこまでを「公」で担保するのかという議論も不可欠です。実際のところ、安全については「公」である程度担保しないとイケない面があるのは間違いありません。しかし、「私」だと安全・安心は担保できないのかと問われると、決してそんなこともありません。

これらを踏まえると、「公」は最低限となる「ここから下に落ちると消費者の見えないところで子どもが危険にさらされる」とか「建物が倒壊してしまう」といった線を担保して、その後は「私」にまかせて消費者・保護者が満足するような仕組みをつくるというのが一般論としての結論になります。こういった「私」と「公」のハイブリッドのような仕組みがとくに望まれているのが、グレーゾーンのさまざまな財・サービスでしょう。

【加賀美】 確かに、近年の民営化は PPP (パブリック・プライベート・パートナーシップ：公民連携) と呼ばれる、「公」と「私」が連携する PFI (プライベート・ファイナンス・イニシアティブ) や指定管理者、コンセッション等の方式で広がっていますね。

【松井】 私は民営化の方式を研究しているわけではないので、ひとつひとつの事例の評価はできないのですが、大枠では、いずれの場合も大事になるのは、評価システムをきちんとつくることです。

また、選択肢については、「いま」である必要はありませんが、4 年後には見直して場合によってはきちんと変えるための手続きが整っていることが必要でしょう。適切な評価システムと、その評価が選択肢として反映されるための手続きなしには、民営化したところで政府がやっているのとなんら変わらないという話になってしまいます。

繰り返しになりますが、民営化でより安い労働力やより低いコストで財を供給できるなどというのは、私はむしろ枝葉末節だと思います。結果として低コストで済むのは魅力的なのかもしれませんが、それ自体が民営化の目的ではない、ということはいえるのではないのでしょうか。

市場の選択肢は「いま」に限らない

【加賀美】 市場が有効に機能するためには、選択肢の多様性がある、あるいは競争があるとも言え換えられると思いますが、財の性質からいって、独占的に提供される「水」などの分野における競争は、なかなかイメージしにくいところです。

【松井】 「水」あるいは「水道」といったインフラ的な財、あるいは公共財は、身近なところだと、学童保育が似ています。学童保育、とくに小学校の放課後の学童保育は、別の小学校の保育に入れるのは大変ですから、どうしても同じ小学校の保育に入れる

という話になると思います。これは選択肢がないわけですから独占です。しかし、独占だからと言って、「私」の学童保育がうまくいっていないわけではありません。要は、利用者が評価して、場合によっては「この運営主体はあまりよくないから変えるべきだ」と意思決定し、実際に変えるためのプロセスが整っていることが重要なのです。

選択肢としては、そのとき、その場では独占かもしれないけれど、もう少し長いスパンで見て、運営主体を変えるといった方法を通じて選択肢をつくっていくことは可能です。

水道など、インフラ的な財を提供する事業の民営化が成功するかどうかは、そうした仕組みをうまく作れるか、上手く使えるかどうかにかかっています。

ただ、こういった評価と選択肢を用意するためのシステムは、公共財に近いものであればあるほどつくるのが難しくなり、より私的財に近いものであればつくりやすくなります。同じ保育でも、就学前の保育であれば、いくつかの選択肢があって、「ここがダメなら次はこっち」という選択も可能ですが、小学校の学童保育になるとそれが難しくなるわけです。ですから、それぞれの財の性質を踏まえて、それぞれの利用者のニーズに合わせて評価して、選択することができるシステムをつくる必要があると思います。

競争におけるセーフティーネット

【加賀美】 競争という焦点に関しては、競争のなかで淘汰される、あるいは競争に負けたものをどうするのか、ということが市場を巡っての重要な論点になると思います

が、その点についてはいかがでしょうか。

【松井】 ひとつ参考になるのは「福祉と市場をどう考えるか」という問題です。私がよく取り上げるのは知的障害者の施設でアーティストを育てている事例です。そういう施設はけっこうありますが、とくに深くお付き合いしているのが、大阪の「アトリエ・インカープ」です。ここのシステムはけっこうユニークで、まず生活に必要なベースの部分は福祉で提供してもらいますが、だからと言って「君たちは福祉をもらっているんだから横並びね」とは言わず、絵を描かせて、才能のあるアーティストの絵を市場に出して、販売された絵の代金は必要経費を除いてその人の懐に入れるということをやっています。こういうハイブリッドは当然あってしかるべきです。

福祉的な考え方は重要で、いわゆるセーフティーネットを敷いておくことは必要ですが、それを超えて伸びようという人を育てるのは市場です。この二段構えが世の中にはどうしても必要だと思っていて、「アトリエ・インカープ」の試みは非常に素晴らしいと思います。

なかには「福祉に頼っていながら、まだ市場でも稼いで」と言う人もいるらしいのですが、それは違うと思います。われわれはみんな市場にも福祉にも頼っているのです。「公」が提供している生活手段を福祉だと捉えれば、確かに彼らは「公」に頼っています。しかし、「公」に頼っているのは私たちも同じです。警察に頼り、道路などのインフラストラクチャーに頼り、諸々の行政サービスにも頼っている。われわれみんなが「公」に頼っていて、その程度の違いがあるだけなんです。「公」に頼りつつ、われわれは市場にも参加して、儲ける人は儲ければよいということです。それを知的

障害者の人たちがやっても悪いことは全然ないでしょう。そうすることで、最低限のセーフティーネットから抜け出て、障害があっても輝ける人がたくさん出てくる。これが市場の一番のメリットです。

市場を批判する人は「市場だけだと敗者が出てきて、そこはどうしようもなくなってしまう」と言いますし、私もそう思います。しかし、セーフティーネットをかけた上で、セーフティーネットの上に来る2階建て部分としての市場は、われわれの人生を豊かにしてくれるのではないかと思います。市場だけでできることも、「公」だけでできることも限られています。そこはうまく使って物事を考え、社会全体のシステムを構築していくことが大事でしょう。

また、社会の役割として「共」の部分が低下しつつあると先に述べましたが、「アトリエ・インカープ」のような仕組みは、市場的ですが同時に「共」の試みでもあると思うんですね。今回インタビューをお引き受けした理由のひとつも、私自身「共」といったことに関心があったからです。完全に純粋な市場でもなく、一般的な「公」でもなく、人と人のつながりで何かを築いていく。現代ではそういうものが減っただけに、今後、それを構築する努力がたいへん重要ではないかと思います。

いま私は東京に住んでいますが、都会でも、まちの掃除などについては、地域の人が率先して、みんなで集まって掃除をしたりするように、みんなが集まって何かをするような、さまざまな地域の活動は存在します。それは、現代の社会ではとても重要なのではないのでしょうか。そのなかに、生協のような物の取引も含まれていると思いますし、そういった「私」「公」「共」の3つのかなえがないと社会は倒れてしまいます。その意味で、弱くなった「共」の部分

をどのように強化していくかは今後われわれに課せられた重要なミッションのひとつだと感じています。

経済学も、実は市場原理主義の人はほとんどいません。当たり前ですが、それでは論文が書けないのです。とうの昔に市場原理の研究は終わっていて、いまはむしろ市場がうまくいかないことを前提にして、どのようにうまくいかないのか、どのように補完すれば経済がうまく回っていくかを考えるのが経済学の問題意識です。私は障害と経済といった話をしていますが、市場の重要性を認めた上で、市場だけではうまくいかない社会のなかで何をすべきかを考えることが、すごく大事ではないかと思います。

人間関係から市場を読み解く ゲーム理論

【加賀美】 そうした、なぜ市場がうまくいかないのか、という問いを深めるなかで、現代の経済学の理論的支柱となるゲーム理論が登場した、とご著書で述べられていたと思います。ゲーム理論という名前こそ広く知られていますが、これはどのような研究なのでしょうか。

【松井】 ひと言で言えば、「人間関係を科学する学問」ですね。人間や人間関係はとても複雑なので、「どうやって科学するんだ」という話になると思いますが、複雑という意味では、たとえば天気予報の外れ方を見ればわかるように、気象現象だって複雑です。それでも科学して、すべては無理にしても、ある程度の見通しをつけている。人間関係も同様です。私はよく恋愛関係を例に出して、「恋愛なんか絶対に学問で解け

こない」と言っていますが、学問で解ける人間関係だってある。ゲーム理論は、簡単な、言い換えれば解ける人間関係から発展してきました。

実際、最初の頃のゲーム理論は、ジャンケンのような、ゲー、チョキ、パーを混ぜて出せばいいだけの、理論の助けを借りなくとも誰でもわかるゲームの分析から始まりました。もちろん、シンプルなゲームの分析ですから、当初の結論は「当たり前といっちゃ、当たり前だね」という話だったのですが、だんだんと当たり前でないところに広がり、いままではわからなかった人間関係の問いにも応用・適用できるようになってきました。そうして、人間関係全般とは言いませんが、いろいろな人間社会の仕組みを理解する手助けになってきたのです。

【加賀美】 それまでの古典的な経済学では、人間関係の複雑な部分を読み解くことができなかったわけですか。

【松井】 ゲーム理論と並ぶ経済学の理論的支柱は古典的な価格理論です。これは価格でもって、需要と供給を調整するという理論ですが、私が生まれる前には研究が一巡してしまっていて、今の価格理論の研究は、重箱の隅をつつくような状況です。むしろ、需要と供給の調整でうまくいかない問題を考えることが、経済学にとっての一番の課題になってきたわけです。そうなるとゲーム理論のように人間関係を考えることが重要なキーになるわけで、「顔の見える関係性」などが非常に重要になってきているんですね。

経済学のそうした分析のなかで、いま最もおもしろい 이슈のひとつは「マッチングマーケット」と呼ばれるものです。世

の中には、いわゆる値段をつけてお金で取引するのが倫理的・社会的な意味でふさわしくない分野があります。たとえば、学校選択や臓器移植、あるいは基本的にお金とは無関係に人を配置しようとする研修医等があげられます。これらは、財やサービス、労働力の配分に関わる問題ですから経済学の範疇です。そういった、お金を媒介せずに財やサービス、労働力の配分の仕方を考える分野を、マッチング理論とかマーケットデザインと呼んでいます。

この分野の世界のトップランナーである小島武仁さん（スタンフォード大学）が、日本経済新聞の「経済教室」（2018年12月4日付）に寄稿していますので、詳細はそちらを参考していただければと思います。が、お金を介さない財・サービスの配分をどうするかは、経済学における近年のホットイシューです。

市場を通じて依存先を広げ自立する

【加賀美】 そうしたホットイシューとはまた異なる視点として、松井先生は市場を通じて依存先を増やすことで自立しようという主張をされています。具体的にお話いただけますか。

【松井】 依存と自立を考える一番よい例は、東大先端科学技術研究センターの熊谷晋一郎さんが考えた話です。それを私が聞いて、これは経済・市場の問題にそのまま使えるなと思って、市場の話として持ち込ませていただきました。

熊谷さんがお話されたのは、障害者が一番困るのは選択肢の少なさだという話です。彼があげた例ですが、大地震が起きた

とき、2 階からどうやって逃げるかで考えてみましょう。健常者なら、まず階段を探して、階段から逃げる。あるいは、後ろから火が迫り、階段も崩れそうで危ないときは、下が芝生で、2 階くらいの高さからならば、最終的には飛び降りるのもひとつの手です。ところが、車椅子ユーザーは階段を降りたり、窓から飛び降りたりといった行為が、少なくとも一人ではできません。そうすると彼らは、その場にとどまって火が消し止められるのをじっと待つか、エレベーターが動くのを待つかといった選択肢しか選べなくなります。バルネラブル・グループとも呼ばれますが、何かが起こったときに選択肢の少なさから、たいへんな困難に直面してしまうわけです。

こうした事態を整理すると、障害者にとって 2 階から 1 階に移動するときの選択肢が、エレベーターしかないのが最大の問題です。それに対して健常者は、選択肢がいくつもある。階段もある。エレベーターもある。本当に危険だったら、飛び降りるという選択肢もある。この選択肢の差をどう考えるべきなのでしょう。

ここで「依存」という言葉を使うと、障害者は「エレベーターに依存している」と言い換えることができます。しかし、健常者もまた、階下に行くためには何かに頼っていることに違いはありません。エレベーターが止まり、階段も崩れ落ちれば、1 階に移動することは健常者であっても困難でしょう。2 階であれば飛び降りることもできますが、仮に 10 階であればそれも無理となります。そういう状況を見ると、実は健常者もふだんの生活では「エレベーターと階段に依存している」わけです。ですから、健常者もエレベーターと階段の両方がなくなってしまうと困る。けれども、階段かエレベーターの、どちらか一方があ

ればなんとかなる、とも言えます。これは、一つのものに依存しているわけではないことを意味します。片方が壊れたときは、もう一つの選択肢を採れるのです。

この階段やエレベーターを、障害者の支援者という、障害者にとっての自立の問題に引き寄せて考えてみると、熊谷さんの場合は、高校までは母親に全面的に依存していたわけです。けれども、大学進学で東京に出てきてからは、いろいろな支援者（現在は 30 人以上がリストアップされているそうです）に依存する状況に変化しています。彼はトイレに行くにしても、支援者をお願いしなければいけないので、その意味で支援者に依存はしています。しかし、絶対にこの人でなければ、というかたちで一人の支援者に依存しているわけではありません。

そうすると、一人ひとりの支援者は母親のように命綱のような太くて強いパイプではなく、どちらかと言えば細い紐なのだけれども、それが 30 ～ 40 人分合わさってできた綱（ネット）のようなものに依存していることになる。それは綱（ネット）のようなものなので、ときに一本ぐらい切れても、他でなんとか体を支えられる。だから、一見すると依存先が多いため、自立しているように見えないけれども、実は自立できているんです。実際、熊谷さん自身、自立というのは、依存先がどんどん増えて、特定のひとつに依存している感じがしなくなった状態だと言っています。

これは市場も同じです。パンを買うとき、あるパン屋で買わないと飢え死にしてしまうとなると、そのパン屋に依存することになりますが、パン屋が 3 軒あって、さらにコンビニも 10 軒あるとなると、依存している感じは受けませんよね。どこかでパンを買わないといけなければ、特定の

お店で買う必要はないので、自分たちは自立しているように感じるのだと思います。市場には、こうした側面があります。子どもが、自分は自立していないとを感じるのは、親という特定の誰かに依存せざるを得ないからです。反対に、大人が自立しているように感じるのは、Aさんにも頼れるし、B企業にも頼れるし、C企業にも頼れるし、D企業にも頼れるからです。

私がもう一つ提起したい問題は、エリートビジネスマンも結局、自分の働いている会社に依存していて、それに気づいていないだけということです。むしろスキルがあって大中小を問わず、企業を渡り歩けるような人こそが自立していて、「この会社がつぶれたら自分も運命をともにしないとイケない」というようなエリートビジネスマンほど、たぶん依存度が高く、自立していないと言えるのではないのでしょうか。

市場をうまく使えば、依存ばかりしているように見えても、実は自立することができるようになるのです。

【加賀美】 市場を通じた自立という発想はたいへん興味深いです。

近年、ひとびとの助け合いが大事だと言われる一方で、「助ける」「助けてもらう」ことに気構えてしまう人たちがいるので、ビジネスや市場といった仕組みを通じて助け合うかたちが、援助する側もされる側もありがたいという指摘もあります。そうした話とも通じるところがありそうですね。

「私」と「公」と「共」

【加賀美】 お話の最後に、改めて「共」もしくは協同について可能性や期待、あるいは市場との共通性、市場メカニズムから示

唆される可能性などについてお伺いできますか。

【松井】 我田引水的な例になってしまいましたが、震災後に頻繁に福島へ出向いて、学習支援の取り組みをさせていただきました。この学習支援は「共」、市場を介さない「共」だったからこそできたのであり、「公」に近いものであれば、おそらく実施は無理だったと個人的には思っています。なぜ「公」ではダメかと言うと、「公」は公平性がものすごく重要だからです。学習支援に一つの学校にだけ入って、他の学校に入らないなんて言うものすごい文句がくるわけです。私がやったときも、いろいろなところから文句はきましたが、この支援は「共」、つまり「私が個人的にやっていることなので」という説明ができました。さらに、非常に良かったのは、この支援が私の活動だけにとどまらなかったんですね。私は相馬高校を中心に支援に行っていたのですが、「できれば他の学校にも展開したい。他の人もやってくればいいな」と思いながら、なかなかうまくいきませんでした。ところが、ひとり奇人な人が現れました。それが前川直哉先生です。彼は灘高の正規教員の職を投げ打って福島に移住して、この活動を積極的にやり始めて、今では10以上の高校を対象とするまでに活動が広がり、いろいろな学校で同じような活動ができるようになりました。

これは向こうの先生と信頼関係を築かないとできないので、まさに「共」なんです。「共」を、人と人のつながりで何らかの財やサービスを提供していくことだと考えれば、この学習支援はまさに「共」でなければできなかったことです。

また、徐々に広げていくのも「共」ならではの取り組みです。これが「公」であれ

ば、「せーの」で落下傘的に全体を覆い被せないといけなかったでしょう。マンパワーも足りないの、そうした形では絶対に実現不可能だったと思います。「公」は、公平性の担保が必須条件になってしまうので小回りが利かない。もちろん「共」だって目が行き届かないところもあれば、行き届いているところも出てきます。そこだけ見れば得をしている学校と、打ち捨てられているような気がする地域や学校が出てくるかもしれない。でも、長い目で見れば、それが広がっていくことで、全体としては上がっていくことが期待できます。

そこにデコボコはあります。でも、そのデコボコを恐れていたら、たぶん何もできません。公平にするのは簡単です。何もやらなければ公平なんです。でも、それは意味がない。何かをしないと世の中はよくならない。そのときに、「公」のように全体を覆い被せないといけない、あるいは「私」のように利益が出ないといけないといった制約のあるシステムではなく、それらとは異なるメカニズムがあってほしい。そこは「共」ならではの活躍の場と言えらと思います。

だから「共」については、地域差などをあまり気にしなくてもいいのではないのでしょうか。地域差を気にしていると足が遅くなるので、とにかくできるところからやるのが一番のポイントかなと思います。それができるのが「共」であって、「公」ではできないことです。しかも、「私」のように私的利益を追求するものでもない。「私」が私的利益を追求することでうまくいく場合もありますが、うまくいかない分野もあります。そういうところにこそ「共」の力を発揮する余地があるのではないのでしょうか。そうした部分で再び「共」が広がっていかないと、3つのバランスがうま

く取れないかなという気がします。

【加賀美】「公」には「公」の、「私」には「私」の、「共」には「共」の役割があるということですね。

近年は、「共」の部分でも公平性が求められたりしていますが、それでも社会をよくするためにデコボコを恐れず何かを始める。それが「公」ではできない、「私」ではやらない「共」の可能性だということは、とても励まされた思いです。

本日はどうもありがとうございました。